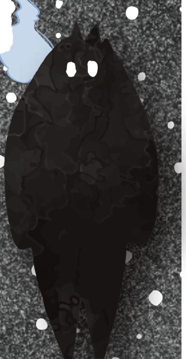
黒木あるじとひがしね百物語



第二夜

瓦版

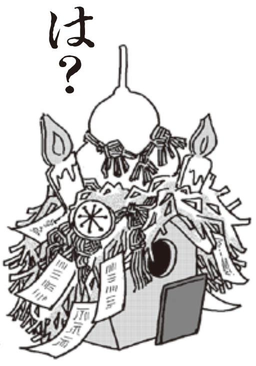
まなびあテラス

2020年8月00日発行

ひがしね百物語とは？

山形市在住の怪談作家・黒木あるじ氏をナビゲーターに迎え、「ひがしね百物語」と称し、怪談を切り口に、その地域にまつわる様々な伝承や歴史などの物語を掘り起こしてゆくプロジェクト。毎回少しずつテーマやアプローチを変え、東根を新たに読み解いてゆく。

ふしぎポストとは？



開催日約一か月前から百物語当日まで、館内に出現する怪談投稿専門ポスト。館内の図書館入口に設置され、来館者からの不思議な体験談の投稿を受け付ける。投稿された中から黒木氏が厳選し、当日に参加者に紹介する。紹介された方には特製ステッカーを進呈。主な材質は木材、ひょうたん。投函口が狭い。

ナビゲーター
黒木あるじ

一九七六年青森県生まれ。二〇〇九年、『おまもり』で第7回ビーケーワン怪談大賞・佳作を受賞。『ささやき』で第1回『幽』怪談実話コンテストブンまわし賞を受賞し、二〇一〇年に『震（ふるえ）』でデビュー。近著は『終（しまい）』『黒木魔記録』『掃除屋（クリーナー）プロレス始末伝』など。山形市在住。

第二夜　「冬怪談」

第一部　雪山にまつわるふしぎ
訪れる異形のものたち
第二部　ふしぎポストの投稿の紹介
怪異譚蒐集の時間

日時　二〇二〇年一月二十五日（土）一七時～一九時
場所　まなびあテラス 講座室

スタッフ
朗読：白井　司会：天野
企画：まなびあテラス市民活動支援センター 天野・高橋

第一部①

雪山にまつわるふしぎ

炎が爆ぜる暖炉の前で、山小屋の主人・黒木氏が雪山にまつわる二つの話を披露し、それを受けて山形県に伝わる雪女の昔話が朗読された。

黒木▼こんな冬の暖炉で語らうに相応しいのは昔語りであって、冬と怪談は相性が悪いと言う人もいる。確かに夏は、死者が帰って来る盂蘭盆会（うらぼんえ）の季節だから怪異と出会う機会もままあるが、味わいのある怪談は冬も負けずに多い。

A子さんが大学生の頃はバブル華やかなりし時代。冬はスキーに行くのが大学生の習いであり、彼女も友人達と東北某所へ出かけた。ところが、着いてすぐに足をくじいてしまい、泣く泣くスキーを断念、民宿に一人居残ることになった。暇つぶしに宿の中をぶらぶらしていると、渡り廊下でつながる民家と思しき建物から「どうしたね」とおじいさんが出てきた。事情を話すと、「それは大変だったね、よかったらお茶でも」と茶の間に通された。聞けば彼はこの宿の当主で、今は雪かきを手伝うくらいの隠居暮らしだという。思いのほか話が弾み、A子さんはふと、楽しんでいるであろう友人達が頭によぎり、「スキー、したかったな」とこぼした。すると老人、「地元の者から言わせたら、ここの一番のおすすめは夏の季節だよ」と魅力をとくと語り始めた。情景が目に浮かぶような熱心な語り口で、「よかったら夏にもう一度来てごらん」という勧めに、彼女は素直に頷いた。

半年後の夏、A子さんは老人との約束通り、かの民宿を予約して一人再訪した。しかし、到着したものの、宿はがらんとして客も誰もいないし、女将の出迎えも無い。何より、あの老人も居ない。喜んで出迎えてくれてもよさそうなものなのに。声をかけるも返事が無いので、老人の部屋を訪ねてみることにした。勝手知ったる間取りを歩いて辿り着き、引き戸を開けて息をのんだ。

誰もいない茶の間。外を見渡せるほど大きなガラス窓が部屋の奥に備わり、その向こう側にあの老人がいた。

―さかさま。

真っ赤な顔をしてこちらを睨んでいる、さかさまのおじいさん。

ぎょっとしているとそれは姿を消した。苦悶の表情も、真っ赤な皮膚の色も、さかさまなことも、まるで理解できずに立ち尽くしていると、後ろから襖が開く音がして、ぱたぱたと女将が入って来た。「ごめんなさいね、急用でみな出払ってしまって」と不在を詫びる。今あったことを慌てて話すと、「本当に、あんなことでねえ」と女将の目にわっと涙が溢れた。恐る恐る尋ねると、「うちのおじいさんね、あなたたちが来た翌週に、屋根の雪下ろしをして、落ちて亡くなっちゃったのよ。ちょうどそこに真っさかさまに雪に刺さっちゃって。見つかったときはもう息が無かったんだけど、頭から刺さったから、最期はさぞ苦しかったでしょうに」

―あの苦しそうな顔は、臨終の顔か。不自然な恰好にも合点がいくと、それ以上恐怖は感じなかった。むしろ、あんな形で顔を出してくれたのかとさえ思った。もう何の姿も見えない窓に向かい、手を合わせて静かに瞑目したという。

このお話をA子さんから聞いたのが二〇〇八年頃。まさにその舞台となった村でのことだ。実はA子さん、その後村に足繁く通うようになり、地元の若い衆とねんごろになって嫁入りし、今ではこの村の住人になってしまったのだ。

「あのおじいさんが、私たち夫婦の仲人のようなものですよ。幽霊に引き寄せられて結婚するなんてこともあるんですねえ」と、ちょっと嬉しそうに話してくれたのを、今でもよく覚えている。

▼たくさん怪談を集めているけれど、スキー場を舞台にしたものは少なくない。幽霊がスキーを履いてボーゲンで滑っていたとかいう類ではなく、「得体のしれない何かと出会う」話が散見されるのが興味深い。スキー場というのは基本的に山である。山は聖域であり、里山といえど基本的には人が踏み込んではならないエリアである。神々、人ならざるものが棲まう場所を人が勝手に遊び場にしているのだから、不思議なものに出会うのは〝しょうがない〟のだ。その中でもとりわけ不思議な話を一つ。

山形と宮城の県境の小さなスキー場のお話。スタッフは農閑期の地元民で、Bさんもそんな一人。一人乗りの古びたリフトの乗り降りを介助するのが仕事だ。ある年の十二月二十日のこと。地元の言い伝えで昔から入山を禁じられている日だが、スキー場には関係が無い。Bさんはその日も勤務していた。乗り場の雪を竹ぼうきで払っていると、にわかに雲行きがあやしくなったと思った矢先、降りてくるリフトの一つに、何やら鮮やかな色をしたものがのっているのが見えた。ようやくそれが何かを確認できるようになってBさんは唖然とした。リフトの真ん中で、おもちゃのコマがクルクル回っている。ただ置かれているならいざ知らず、直前に誰かが回したように安定して回転し続け、強い風にもびくともしない異様な光景。呆然として見ていると、リフトは回転コマを乗せたまま再び山に上がっていった。もう一度降りて来はしないだろうかと、目を皿のようにして確かめたが、二度と見ることはなかったそうだ。Bさん曰く、「あれは、山の神様のようなものが〝今日は入ってはいけないよ〟と優しく警告してくれたか、からかわれたんだろうな」。

幽霊に会うという怪談が多い中で、コマと出会った話はこれだけなので特に気に入っている。

会場を吹雪の山小屋に見立て、黒木氏は山小屋の主人として暖炉を前に怪談を語るというシチュエーションで幕を開けた。

朗読「お金になった雪女」

あらすじ…山深いところに大小二つの家があった。幾日も吹雪が続いていたある晩、大きな家の方に雪まみれになった若い女が訪ねて来た。ぞっとするようなつめたい顔色をして、「旅の者だが、一晩泊めて欲しい」と言う。大きな家のおやじは金持ちだったが、ケチだったので、行き倒れに関わっては厄介と、追い払ってしまった。すると今度は小さな家にその女が現れ、同じように頼んできた。小さな家のおやじさんとおかみさんは、困った時はお互い様、と快く泊めてやった。翌朝、大雪はやんで空は美しく晴れわたった。二人が旅の女を起こしにいくと、布団の中には濡れた白い着物と金のお金がどっさり残され、女の姿は跡形もなかった。その後、小さな家は栄えていったが、大きな家のおやじは病気になり、家はつぶれてしまった。雪とともに天から来た雪女がお礼にお金を置いて行ったのだろうという事だ。

黒木▼雪女と言えば、小泉八雲（※注1）の怪談が有名だ。吹雪から逃れた老マタギ（※注2）と若いマタギが眠る山小屋に、深夜、雪女が来て老マタギを凍死させる。若いマタギは他言しないことを条件に見逃される。その後、若いマタギは嫁をもらい子どもに

も恵まれるが、吹雪の晩、嫁に雪女の話を聞かせると、「他言しない約束だったのに」と嫁が雪女の正体を明かし山に帰ってしまうという話だ。一方、朗読の雪女は最後、なんと現金になってしまった。この雪女の正体をお正月の神様であると伝えている民話集もある。これは、恐れるものに立ち向かい看破することで富を成す『豪傑譚』である。例えば、新庄市に伝わる産女（うぶめ）の話。産女とは、お産で亡くなった女性の妖怪である。夜、侍が女に出会い、赤ん坊を抱くよう頼まれる。抱っこすると女は消え、腕の中の赤ん坊が石のように重くなる。必死で重さに耐え朝を迎えると、赤ん坊が小判に変わっていたという。宝物は恐れなかったことに対する対価である。

昔は雪女やあやかしの話はそこかしこにあり、幽霊よりも身近で、皆に信じられていた。推測するに、雪害で亡くなるなどの過酷な被害が実際に多く、雪がある種の魔物、人知を超えた驚異として説得力を持っていたからだろう。しかし、雪がそこまで恐ろしいものではなくなった現代では、雪女はリアリティを持たなくなる。「雪女が出た」なんて、今では誰も思わず、「得体のしれない女はすべて幽霊」になってしまった。雪女が題材になるのは、昔の山形ではそれだけ身近な存在であったとも言える。

今日の帰り道で、もし得体のしれない女性を見かけたときは、「あれは幽霊かな、雪女かな」と考えてみて欲しい。怪異は文化的な背景もはらむという、雪女のお話。

※注1　小泉八雲（一八五〇―一九〇四）本名ラフカディオ・ハーン。ギリシャ生まれ。小説家、日本研究家、日本民俗学者。日本の怪談話を英語でまとめた『怪談』などを発表、日本文化を紹介する著書を数多く遺した。

※注2　マタギ　東北地方・北海道から北関東、甲信越地方にかけての山岳地帯で、古来より伝わる方法を用いて集団で狩猟を行う。県内では鶴岡市や小国町などが知られる。

「お金になった雪女」出典

『県別ふるさとの民話4　山形県の民話』

日本児童文学者協会 編
偕成社　一九七八年　YFヤマ

雪に閉じこめられた囲炉裏端で、じっくりと語りつがれてきた心あたたまる美しい話三十二編を収録。山形県を代表する児童文学者、須藤克三氏も編集委員として名を連ねる。当館貸出可能。

第一部②

訪れる異形のものたち

遠くはドイツの冬の民間信仰についての朗読を聴き、「訪れるもの」について黒木氏が二話を披露した。

朗読「クリスマス（降誕祭）」

古代ゲルマンの信仰では、冬至は神聖な時期であって、太陽がその絶え間のない運動を一時的に停止する日とされていた。その時には、時間の概念は消滅し、過去、現在、未来の区別はなくなってくる。過去のことが現存するものとなり、未来の国も目の前に開けてくる。死者の国はその扉を開き、民族の古の王たちが亡者の軍団と共に荒れ狂う嵐の中を飛んでゆく。ヴォーダンの神も伝説の老婆ホレと共に姿をみせ、万物に祝福を与える。したがって民間信仰ではこの日の夜中に、様々な不思議な現象が目にされるという。たとえばチューリンゲン地方、北部山地のキュフホイザー山では、クリスマスの前夜に青いオシロイバナが魔術をくり拡げる。その花をこの夜にみつけると、その人の目の前で地下の大会堂の口が開いて、山の中の宝物の華麗な輝きの中に誘いこまれるという。

『図説　ヨーロッパ歳時記　ドイツの年中行事』よりP一九二～P一九三の一部を抜粋

黒木▼我々現代人は、冬至を重大なイベントとは受け止めていないが、実は一年の中で最も闇が長い一日であり、「人ではないもの」が跋扈する時間も一番長い。スキー場のコマの話にも出てきたが、十二月二十日に入山を禁じる掟は各地で見られ、その掟とリンクしている有名な妖怪がいる。和歌山と奈良に連なる果無（はてなし）山脈に伝わる、イッポンダタラ（※注3）である。山に住まう、片目片足の妖怪。製鉄に携わる人々が成り立ちの背景にあるとも言われるが、「果ての二十日」（はてのはつか）にはイッポンダタラが出るので絶対に山に入ってはならないという言い伝えが今でも伝わる。東西を問わず、冬は夏より恐ろしい。次は「訪れるもの」にまつわるお話。

昨年の九月、西川町図書館でも怪談を行う機会に恵まれた。そんな時は、必ず会場の参加者に体験談がないか尋ねている。質疑応答などよりも参加者の手が挙がりやすく、抜群に面白い話を聞かせてもらえるのだ。

この日もいつものように尋ねてみると、とある年配の女性が、こんな面白い話をしてくれた。

「この辺では、人が亡くなる直前に必ずその知らせがある。皆、それを『シン』と呼んでいます」

初耳だったので大変驚いた。

「漢字ではどう書くのですか」

「漢字はわからない。みんな口伝えで聞いているだけで。ただ、集落の人間は全員そう呼んでいます。シン来たどれ、なんて」

「そんな風習があるんですか。もしかして、あなたのところにもシンは来たんですか」

「ええ、勿論です。私の主人が亡くなる時も、シン、来ました」

もう何十年も前の話だという。

夫が入院していた頃、一人自宅で眠っていると、真夜中に突然ドンドンドンドンと、家中の雨戸を叩く音が一斉に鳴り響いた。彼女は飛び起きて表に出たが、しんと静まりかえり、なんの気配もない。そこでピンときた。

―ああ、これは『シン』が来たんだ。父ちゃんは、もうダメなんだ。

すると果たして、翌朝病院から電話があり、未明に夫が息を引き取ったと告げられたという。

―興奮した。

一度も聞いたことがないタイプだったので、私は会場に問いかけた。

「この中でシンが来たことある方、他にもいらっしゃいますか」

会場には老若男女が四十名ほど、小・中学生もいる。年配の方が三十人前後居たうち、二十人くらいが手を挙げたので、七十代の男性に聞いてみた。彼は、舅から『シン』の話を聞いたという。

ある晩、就寝中に屋根瓦をものすごい勢いでドンドンドンドンと殴りつける音がした。一体何事かと外に出てみたが、屋根には誰もいない。そこで舅は気付いた。『シン』が来たんだ。これは、あいつではないか。数ヶ月前から病に伏せている、親友の大工のことを思い出す。この屋根の修繕も、雨樋の施工も彼によるものだ。きっとあいつが来たに違いない。そう思っていると、やはり翌日、その親友の家族から電話があり、亡くなったと知らされたという。

この男性の隣にいた女性も手を上げた。三十数年前、やはり夫が入院しており、病室の床に布団を敷いて連日泊まりこんでいた。それは大変と、弟の嫁が泊まりを代わってくれることになった。その夜、廊下をガタガタと下駄で勢いよく走ってくる音が響いた。病院で下駄を、しかも夜中にあんな大きな音を。どんな常識はずれかと廊下を覗いてみるも、誰もいない。あぁ、『シン』が来た。じゃあ、お義兄さんは―。義妹の予感は的中し、翌日の昼くらいに容態が急変して、夫は亡くなったという。

西川町にしか伝わっていない『シン』の話を一気に三件も聞けて、私の興奮はピークになった。ところが、それで終らなかった。講演を終えて図書館を出ようとした私に、おばあさんが声をかけてきた。

「あなた気をつけなさいね」と、ニコニコしながら言う。

「シンの話を聞くとね、聞いた人のところへ来るっていうから。気をつけてね」

まさか。茶目っ気のあるおばあさんだと私は軽く受け止めた。

それから数日後。私は仕事場にしている山形市K町にあるアパートの二階の一室で、いつものように原稿と向き合っていた。午後三時頃、突然窓ガラスがバチン、と大きな音を立てた。何かが激突したのか？確かめるも、窓ガラスには何の痕跡も無い。ふと、

―シンが来たのではないか。

しかしすぐに、派手な音が鳴ったのを即、シンと結びつけるのも浅はかに感じて、独りごちた。

「シンが来たわけじゃない。シンなんて――来ないよ」

気を取り直し執筆に戻ると、一時間も立たないうちに、チャイムが鳴った。出てみると、警察官が立っていた。私の名前や居住期間などを訊いた後、下の階の住人に面識があるかどうかを尋ねてきた。

面識はあった。一人暮らしの七十代位の男性で、顔を合わせたら挨拶する程度の付き合いだが。何かあったのか思い切って訊いてみると、一瞬迷った風だったが、

―実はしばらく前に部屋で亡くなったようです――。

そこで思い出した事があった。件の住人は以前、夜中に来客の出入りで騒音を立ててしまうかもしれない事や、部屋の修繕をする時なども、わざわざ丁寧に頭を下げに来ていた。律儀な人だったのだ。自分の死で騒ぎになることを見越して、迷惑を詫びに来たに違いない。やっぱり、シンが来たんだ―。

さて、ここで終わればちょっと不思議な話、くらいだったのだが。

それから約二週間後、私は東北芸術工科大学の大学祭で、長年続けている「怪談売買所」を行った。お客さんから怪談を聞いて百円で買い上げるのだ。夕方五時近くになり、一人の女性が来た。義理の母の話だという。

七十代の義母は山形市内のとあるアパートに一人暮らし。毎日のように様子を見に訪ねていたのだが、ある日、暗い顔をして「私、ボケちゃった」としきりに嘆く。話を聞くと、前の日の夜中、チャイムが鳴ったので誰だろうと思い玄関を開けると、

―木。

人の背丈くらいある樹木がドンと立っていたのだという。「すごくびっくりしちゃって、慌ててドアを閉めたの。でも、気になってまた開けたら、もう木は無くて。私、おかしくなってしまったのかも」と項垂れている。聞いても理解できず、かといって否定もできず、あまり気にする必要はない、と慰めてその日は終わった。

ところが数日後、義母が興奮した様子で電話をかけてきた。「あの木の正体が分かったわよ！」

警察官が訪ねて来て、向かい部屋の住人が孤独死したことを告げたのだという。ご近所ゆえ、挨拶を交わすことは日常だった。複雑な胸中で、騒然とする向かいの部屋を窺って、思わずあっと声を上げた。玄関に観葉植物のパキラが茂っていた。以前チャイムが鳴って玄関に立っていたあの木だ。

きっとあの時、もう彼は亡くなっていて、挨拶に来てくれたのではないかと義母は語ったそうだ。

彼女の話を聞きながら、私は青ざめていた。状況があまりに似すぎている―。

「お義母様のお住まいはもしかしてK町ですか」「ええ」「○丁目の○○の」

え、という顔をされた。「○○ハイツではないですか」

女性は絶句した。義母の部屋は私の部屋の向かい側の下、件の男性の部屋の真向かいにあたる部屋だった。シンは来たのだ。うちと、その他にも。

今日、この話をするかすまいか、実は迷っていた。西川町の老婆の言葉。

―シンの話をすると、シンが来る。

▼最後に、地域に絡んだ、「訪れるもの」の切ない話を一つ。

山形県S町のタクシー運転手が体験したというお話。その晩、S町は猛烈な吹雪に見舞われ、客足はほとんど無かったという。ところが、とある駅の近くで、一組の男女が乗り込んできた。行先を聞いて車を走らせたが、バックミラー越しに見る男性の顔は険しく、前を向いたまま一言も口を利かない。女性もすまなそうにうつむいたまま会話するそぶりもない。喧嘩でもしたのかと気にはなったが運転に集中した。猛吹雪で視界も悪く、ハンドルをとられそうになるほどだったのだ。なんとか無事に着き、勘定をやり取りしようとして、ぎょっとした。女性がいない。ドアはまだ閉まったままだ。狼狽える運転手をよそに、男性は支払を済ませ一人雪の中へ出て行った。タクシー業界ではその手の話には事欠かない。だが、まさか自分が体験するとは―。仲間に話して聞かせよう、と急いで戻ると営業所は異様な雰囲気になっていた。

―この地域を走る特急列車が強風に煽られ、大きな脱線事故が発生した直後だったのだ。事故現場はほんのすぐ近く、前代未聞の大事故に営業所は騒然とし、とても幽霊を乗せたなんて話せる状況ではなかった。

翌日も救助活動は続いていた。営業所でニュースをみていてハッとした。昨夜最後に乗せた女性の顔写真が映っていた。テロップから、彼女が事故の犠牲者であることが示されていた。ああ。あの男性は、きっとこの女性の大切な人だったのだろう。駈け付けてくれて

申し訳ないと思ったのか、一緒に帰れると思ったのか。恐ろしさよりも、「乗せてあげて良かった」と安堵した気持ちになったという。

乗せた客が消えるタクシーの怪談。よく耳にする典型的な話の一つかもしれない。しかし、地域の出来事や想いが重なった途端、そこに奥行きが出る。土地の匂いを孕んで、恐ろしさも悲しさも、地域の想いと混然一体となった物語に昇華する。闇に跋扈するいろいろなものがいる。それを恐れることなく、隣に暮らすものとして共に春を待つのも悪くない冬の楽しみではないだろうか。

※注3　イッポンダタラ　名称こそ同じだが地域によって性質が異なる。果無山脈のイッポンダタラは、ハテ（十二月二十日）になると現れ、旅人を喰らうため、峠越えをする者がなくなった（ナシ）という果無山脈の語源となったという説がある。

出典
「クリスマス（降誕祭）」

『図説 ヨーロッパ歳時記 ドイツの年中行事』
福嶋正純・福居和彦著
八坂書房　二〇一六年
386.3フ

ヨーロッパの人々はどのように一年を過ごしたのか。ドイツを中心に、日常をいろどる聖俗の行事を、図版とともに紹介。教会暦の背後に息づく、伝統的な庶民の「一年」の姿にせまる。当館貸出可能。

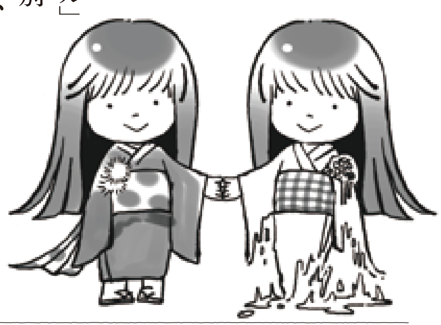
第二部

ふしぎポストの投稿の紹介

怪異譚蒐集の時間

寄せられた投稿と、当日の参加者による怪談披露の一部をご紹介。

ナンバー「タイトル」
名前／年齢／性別
寄せられた投稿は、掲載に際して編集しております。



1.「夜の音楽室」笹芽久美／32／女▼学生の時の話。夜、音楽室の反対側の廊下の奥からガツーン！ガツーン！と大きな音が鳴り響いた。怖くなり、急いで学校から出たが、一緒にいた同級生は、時計の秒針の音にしか聞こえなかったという。

2.「からころりん」さやこちゃん／8／女▼寝ている時に、鈴のような足音が聞こえた。

3.「見えざる手」塩野杏花／7／女▼学校で階段を降りていたら後ろから押された気がして振り向いたが誰もいなかった。べとべとさんではないかと思った。

※べとべとさん…妖怪の一種。夜道で人の後をつけてくるという。

4.「デ・ジャブ」さいとうあけみ／48／女▼小学生の時に印象の強い夢を見た。出てきた場所も人もはっきり覚えていたのだが、ある日、夢で見たのと同じ体験をした。「この場面見たことがある」「その言い方、夢で見た」と不思議に思った。

5.「変身三昧」なまず／43／男▼保育園児の頃、出かけるため母と自宅の裏手に向かうと、煙とともに天狗が現れた。二メートルを超える長身、真っ赤な顔、羽団扇を持ち、丸いボンボンの付いた法被を着て、私たちを見下ろしていた。固まっていると、またもくもくと煙が立ち、天狗は河童に変身。身体はビリジアン色、皮膚はケロイド状で、母より低い身長。やはり動けずにいると、また煙。次は大きな日本人形に変身した。両親の寝室にある人形そっくりで、あれが巨大化したものだと子供心に思った。それを見ると、母は自分をおんぶしたまま茶の間に逃げ込んだ。父と姉がいたので、今あったことを話すと、父が「んじゃ、包丁持ってて殺すべ」と言ったのまでは覚えているが、それから先が記憶にない。今、この話を家族にしても、覚えているのは私と姉だけ。家の裏手には、葉が天狗の羽団扇に似ている木があったが、既に切られて無い。あれは一体何だったのか。何か別の出来事が形を変えて記憶されたのか、なぜ両親は覚えていないのか、なぜ父は包丁を持ち出したのか、不思議だらけだ。

6.「名前の通りに」kioly／42／女▼猫の「流」と犬の「星」を飼っていた。飼い始めた時期は違ったが、二匹とも同じ週に寿命で亡くなった。名前の通り輝く「流星」になったのか。名前の持つ不思議な人（猫犬）生の話。

7.「獣の目」黒悪魔忌／53／女▼夫の妹が実家である我が家に帰ってくる時は必ず飼い犬二匹も連れてくる。普段は何もないのに、春・秋の彼岸とお盆の時だけ、仏間の写真に向かってワンワンと吠える。ご先祖様や仏様が見えるのだろうか。

8.「最後のご挨拶」かとあゆ／36／女▼知人の祖父は、酸素ボンベの持ち歩きが必要なほど体が弱り、家に篭りがちになってしまった。そんなある年の十二月二十八日、突然出かけると言い出した。自営業で交友関係も広かったのだが、挨拶回りに向かうと言う。家族は驚きつつも送り出した。無沙汰していた先や仲が良かった友人、色んな人に会いに行ったという。その翌日、祖父は息を引き取った。

9.「噂をすれば」K・M／27／女▼母の職場の出入り業者の方が震災で亡くなった。その後、職場でふとその人の話題になったところ、突然風が吹いて、室内を駆け抜けていった。窓やドアは閉まっていたという。

10.「べとべとさん手押し車ver.」かわうそ／27／男▼高校生の頃、部活帰りで夜も遅い中、一人で歩いていた。後ろから手押し車を押すコロコロという音がする。振り返っても誰もいない。家に帰るまでその音はずっと後ろからついてきた。

11.「俊足の老婆」猫より犬派／40／女▼大学生の頃の恋人の話。深夜、私の住むアパートに向かって一人商店街を歩いていると、手押し車を引いた老婆が笑い声をたててやって来た。すれ違い様、ケラケラと笑って顔を覗き込んできたので無視したが、そのままついてくる。一本裏の狭い路地に飛び込み、まこうと走ると老婆もぴっとりと隣を並走してくる。「あ、これはヤバイ」と、慌てて近くの建物の非常階段を駆け上がった。姿は見えないがまだ近くで笑い声がする。しばらくやり過ごして、遠回りをして私のアパートまで辿り着いた。私はドカスカと階段を駆け上って飛びこんできた彼の慌てぶりに呆れた。酔っ払いの戯言かと思ったが、玄関にしゃがみこみ、事の経緯を話す彼の指はずっと震えていた。

12.「ひらく」猫より犬派／40／女▼11．と同じ彼の話。三階建てのビルの中でアルバイトをしていた。夜、誰もいない二階の事務所を消灯し、エレベーターで降りようとしたが、誤って上階行きに乗ってしまった。まだ上に人がいたんだなと思ったが、扉が開いても真っ暗なオフィスがあるばかりで誰も乗って来る気配がない。変に思いつつ扉を閉めて一階のボタンを押すと、今度は二階で止まった。扉が開くと、さっきまで自分がエレベーターを待っていた位置に、開いた状態の真っ白な傘がポツンと置かれていた。そんなものがあった覚えもなく、真っ暗な事務所の中で、異様な存在感を放っていて猛烈に怖くなり、閉のボタンを連打して逃げたという。

13.「自動演奏」片桐周三代／48／女▼二年前の九月、義父が亡くなった。葬儀からの帰り道、S駅の辺りに差し掛かった頃、車の後部座席に置いていたおもちゃのピアノが突然鳴りだした。一曲演奏し終わると止んだが、その間一度も振り返ることができなかった。

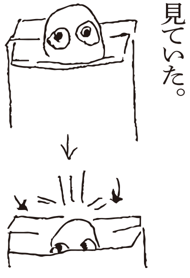
14.「入居時要説明」おなつ／22／女▼以前O中学付近のアパートに住んでいた。いわゆる〝訳アリ物件〟だったようで、深夜人の顔が窓に浮かぶなど、色々怖い体験をした。新居に移ってから、ふと家族に軽いノリで話すと、みな口を揃えて「自分も」という。隣の空き部屋から走り回る足音がした、台所に立っていると後ろの壁から視線を感じた、など。そういえば入居してすぐの頃、部屋に盛塩が置かれていたが、母が早々に「ヤバい」と感じて置いたとか。こんなことがあるなんて入居時に不動産屋から説明を受けなかった、と両親は憤慨していた。

15.「べとべとさんスタンダードver.」なえか／13／女▼誰もいない道を一人で帰っていると、後ろから近づいてくる足音がする。自分の足音かと思ったが、次第に別の誰かの足音だとわかった。恐る恐る振り返るが誰もいない。その後も同じ場所で同じようなことが何度もあった。友達も同じ体験をしたという。

16.「ブラックアウト」まちゃまちゃ／40代／女▼大学生の頃、仲間数人で、M県S町のスキー場へ行った。私は調子にのってスピードを出し過ぎ、大転倒。顔が斜面に激突した瞬間、目の前が真っ暗に。痛みもなく何も聞こえず、ずっと上に小さな明かりが見えるが、暗い淵にどんどん沈んでゆく。冷たさも感じない。「死ぬんだな」と思った途端、暗い水底から水面の明るい方へ急浮上し、視界がまぶしく開かれ、息を吹き返した。レスキューの方が心臓マッサージをしてくれたようだった。怖いとは感じなかった。

17.「シンクロニシティ」くどう／45／女▼小学生の頃、姉と二人で寝ていたら、二人同時に金縛りにあい、同時に解けた。悲鳴を上げて父母の布団にもぐりこんだ思い出。

18.「水の中から」たきぐちなおみ／39／女▼小学校一年生の時の話。J町のO山の一番上に神社があり、手水舎もある。そこにこういうのがいた。目が合うと慌てて引っ込んで、目だけを出して私を見ていた。



19.「涙の理由は」YK／26／男▼中学三年生の時、ペットの兎が死んだ。幼い頃から飼っていたので家族みんなで悲しんだ。直後、中学総体に出場したのだが、試合中もその悲しさを引きずるほどだった。最近、家族とその話をすると、兎が死んだのは私が高校に上がってからの事だ、と全員が口を揃えて言う。納得するしかなかったが、では当時、私が何の死についてそこまで悲しんでいたのか、どうしても思い出せない。

20.「ドナドナ」いのあゆ／36／女▼曽祖父が馬喰（※牛馬仲買人）で、私が幼少の頃もその名残で牛を一頭だけ飼っていた。私も餌付けなどの世話をして可愛がっていたが、ある日売られていくことになり、トラックに乗せられていくのを玄関からじっとのぞいて見ていた記憶がある。その思い出を大人になって父に話すと、「それはお前が産まれる前の話だ」という。

【※会が終了後に投稿されたもの】

21.「もうひとつの『シン』の話」タイラー／72／女▼西川町の「シン」の話、あれは村山市では「スン」と言う。きっと同じものだと思う。今百歳を超える母がよく「スン」の話をしてくれたものだが、特に印象深いのが、Tおばさんの話だ。Tおばさんは父の叔母で、寺に嫁いだそうだが、子どもが出来なかったため、父が養子に出されたこともあったとか。でも父は嫌で逃げ帰ってしまい、結局夫婦は子どもがないまま年を取り、住職が亡くなると、跡継ぎの無いおばさんは寺を出なければならなかった。行く当てのなかった叔母を、うちの両親はもっこさく（可哀そうに）思ったのか、私が子どもの頃、家に住まわせていたのだ。おばさんは屋根裏部屋に寝起きし、母が食事などの世話をしていた。ある日、母が様子を見に行くと、おばさんの枕元に見たことないほど大きな真っ黒い蟻が這っていたという。その次の日、おばさんは亡くなった。皆、あれは、おっさま（住職）の「スン」が迎えに来たんだべと。「スン」は縁のある人達を訪ねて回るという。普通に玄関から入って来る事もあるとか。「スン」とは魂のことです。

怪異譚蒐集の時間

〈参加者による怪談披露〉

1. 女性

自分の結婚にまつわる話。若い頃に、結婚を考えていた恋人との交際を両親に反対されていた。ある日、なぜか祖父から、「お前は大きな花束を持った男性と結婚するよ」と言われた。恋人は当時一般的なサラリーマンで、花束を抱えるような状況とは縁がない。やっぱり彼との結婚のご縁は無いのかもしれない、と感じた。しかし、やがて反対していた両親も折れ、結局その恋人と結婚することになった。結婚後しばらくして、夫は突然サラリーマンを辞め、農業の道に進んだ。しかもなんと、それは「花」農家。毎日、収穫した花を腕いっぱいに抱えて出荷する夫を見て、祖父の言っていたことはこれだったんだと思った。

2. 男性

真室川町に住んでいた祖父から聞いた話。寝苦しい夜、縁側の近くで寝ていたら、足の方からぴた、ぴた、と何かが近づいてくる。片足から脛、太ももと、交互に体の上をよじ登るような感覚があり、金縛りにあったように体が動かなくなってしまった。そのまま気を失ってしまったようで気が付いたら朝になっていた。家族にその出来事を話すと、曾祖母が「それは『タマヘ』だ」と話していたが、それ以上の話は聞きそびれてしまった。

「タマヘ」という初めて聞く言葉に興奮する黒木氏。

百物語に寄せて

― 黒木あるじコラム ―

夏と冬の怪談の大きな違いとして、雪の有無が挙げられる。夏は、人が出かけて何かと出会うが、冬は、それが雪のために叶わないので、向こうからやって来るのだ。有名なのが大晦日の晩に首切れ馬に乗って徘徊するという「夜行（やぎょう）さん」だ。そして山形県庄内地方の「アマハゲ」も『来るもの』である。家々を練り歩き、来訪するもの。アマハゲの系統は日本海側に多く、ナマハゲ、アマメハギ、などと呼ばれるが、特徴はほぼ一緒。鬼の面と藁で出来た衣装を纏い、家に入り込んで家人を襲う。彼らが冬にやって来るのは、潮の流れで日本海沿いには冬に多くのものが流れ着く事と関係する。海から流れ着いたものは神からの贈物、または神そのものという信仰が背景にあるのだ。その一方で、彼らは農村の地霊ともいう。冬に仕事もせず囲炉裏端でゴロゴロする怠け者を懲らしめに、足に出来た火ぶくれをはぎに来るのだ。それは後世に後付けされたという説や、海の向こうから来た神様と、農村の神様とが融合したのではないかとする説もある。これら「来訪神」（※注4）の原点は、冬に対する畏れであったとされる。河童も、ある地方では、春には河童として川に棲み、秋になると山に入って山童（やまわろ）（※注5）になるという。これは田の神様が秋冬になると山に帰る事と関連があるのだろう。春になるとまた河童に戻る。海からも来る。山からも来る。季節の変わり目。そういった節目には、さまざまな魔が訪れるのだ。

※注4　来訪神　年に一度、季節の変わり目に人間の世界に来訪し、豊をもたらす神。世界各地にその信仰が見られる。日本ではアマハゲを含む十件の来訪神行事が「来訪神：仮面・仮装の神々」としてユネスコ無形文化遺産に登録されている。

※注5　山童　毛深い童子姿で、人語を話す山の妖怪。西日本に多く流布し、カシャンボ、山太郎などとも呼ばれる。イッポンダタラと同一視する地域もある。

怪のスポットを訪ねて

中山町　岩谷十八夜観音堂
中山町立歴史民俗資料館

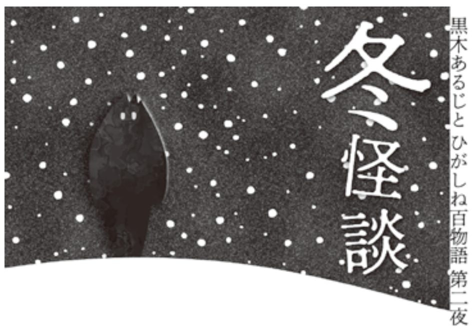
第一夜でもとりあげた盲目の巫女オナカマ。平成七年に中山町最後の一人が亡くなって、中山町のオナカマは絶えた。町の中心地から西の山奥、既に廃村となった静かな集落跡地の入口に、オナカマ達の本山であった岩谷十八夜観音堂がある。月山に代表される、山そのものを神霊、あるいは死後に霊が行き着く所とする山岳信仰は村山地方にも広く普及しており、岩谷もまた先祖供養の信仰を集めた由緒ある山の一つである。起源は飛鳥時代に遡り、古刹である山寺立石寺（山形市）の建立にあたっては、慈覚大師が岩谷に登って開山を決意したとされ（立石寺は岩谷と同じ緯度・標高に建立されている）、岩谷の存在がこの地方で如何に大きいものだったのかが窺える。現在は無人の観音堂ではあるが、毎年八月十八日の観音例祭には修験者の火渡りの祈祷などが行われ、地元だけではなく市外からも大勢の参拝客が訪れ賑わう。

中山町のオナカマは、十八夜様（とやさま）と呼ばれる神仏と霊的なパスを通じてその神意を託宣（口寄せ）し、あるいは故人の霊を憑依させその言葉を伝える巫女である。加持祈祷、易占いも行う呪術のエキスパートであるオナカマになるには、師匠につき、この霊場で修行する必要があった。かつてのオナカマの言葉に、「（憎い）敵の子にもさせたくない」とあるほど修行は過酷なもので、巫業の作法を徹底的に学び、水垢離、断食を含む壮絶な通過儀礼を得て一人前になり、集落に降りて勤めを果たす。相談者は悩みや苦しみをオナカマに託し、身を軽くすることができるが、そのどろどろとした想いを引き受けるに、彼女たちの「ヒト」の器はあまりに小さい。厳しい修行も戒律も、この生業で生きる彼女達を巫女たらしめる不可欠な要素であり、支えでもあっただろう。そう思うと、オナカマが絶えたことを文化的な喪失と考える一方で、彼女達が「誰にも体験させたくない」と言うほどの苦しみもまた絶えたことに、どこか救いを感じずにもいられない。オナカマの廃業、或いはその死亡にあたっては、それまで使用してきた巫具を岩谷に納める習いがあり、観音堂他に奉納されていた多くの貴重な資料は昭和五十九年に重要有形民俗文化財に指定され、現在でも中山町立歴史民俗資料館で目にすることが出来る。使い込まれたトドサマ（絹布などを巻き付けた竹の杖）やイラタカの数珠（黒いムクロジの実の間に古銭、獣の牙や角をはさんだ数珠）を見ていると、かつての我々の祖先が託した思念が布の先にまだ残ってでもいるのではないか、と錯覚するほどの迫力を感じる。観音堂と共に資料館を見学し、かつて祖先と共に生きた彼女達の歴史に、そっと思いを寄せて欲しい。（高橋）

▼岩谷十八夜観音／東村山郡中山町金沢岩谷 1105
▼中山町立歴史民俗資料館／東村山郡中山町長崎 6005

スタッフ裏方ばなし

雪国で暮らす人にとって、冬は憂鬱な季節である。たった一晩で重い雪に覆われ、昼でも日は陰り、身体がきしむような寒さに耐える。そんな日々が数か月続く。私はその中でも特に日が短いのが恐ろしかった。日に日に暗さが増していく中、ひとりぼっちの学校からの帰り道。闇に包まれた墓地の横を通る時には、絶対にそこを見ないように、息を止めて走り抜けた。怖い闇の時間が長くなってしまう―。理科の授業で地球の四季の仕組みを知った時から、冬至を待ち焦がれるようになった。夏至を過ぎるとこれから日が短くなっていく事を憂い、冬至を過ぎればまた日が長くなっていくことに安堵するのだ。また冬は「死」の季節でもある。夏とは違い、外にいるだけで凍り付いて死んでしまうかもしれないのだ。なんて恐ろしい。恐ろしいと思うくせに、雪山で遭難してしまう話だとか、雪の中で怪異に出会う話だとかをよく読んでしまう。特に雪の闇の中を「何か」が徘徊している話にはとりわけ恐怖を感じ、心惹かれた。今回の百物語のチラシのビジュアルは、そのイメージを投影して作成している（※下記掲載画像）。ただ、冬を怖がってばかりだった訳でもない。子どもの頃はクリスマスやお正月を毎年楽しみにしていたし、大人になり、そういった「季節の変わり目に訪れるもの」が罰を与えもするが富をもたらしもする「来訪神」という存在でもあると知り興味が沸いた（サンタクロースも原型は来訪神である）。世界各地によく似た伝承や風習があるというのだから、色々調べてみると面白そうである。果たして、雪の中に佇むあの影は神か魔か、一体何をもたらす存在であるのか―。ちなみに、月明かりを反射して雪が白く輝く冬の夜は、禍々しいものではなく、何か清らかなものが遊んでいるのだと思えるほどに純粋に美しい。そして月も無いのに雪の白さのみで昼間のように遠くまで見渡せるほど明るい不思議な夜もある。そんな夜は「何か」に遭遇しても良いような、ちょっとワクワクした気分になったりもする。（天野）



投稿大募集

① ふしぎポストへの怪談投稿

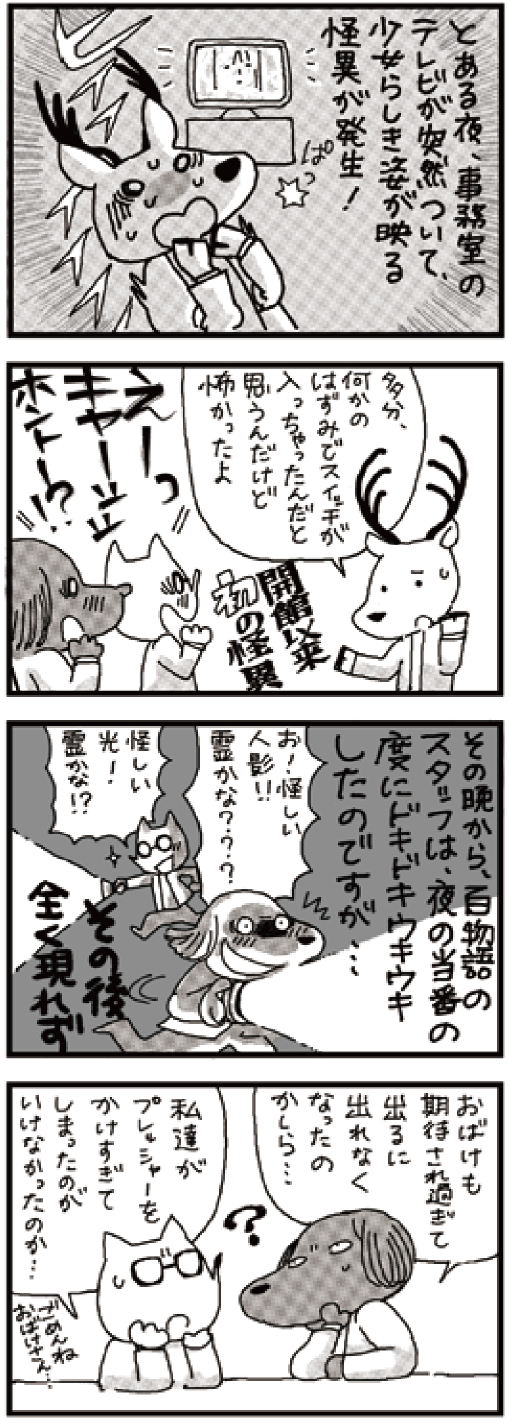
「ひがしね百物語」では、皆様が体験した怪談を随時募集しています。ご自身で体験した不思議な話や、ご家族、お友達の体験談などをお寄せ下さい。百物語当日に黒木氏により発表された方には、黒木あるじ特製除霊ステッカーとひがしね百物語オリジナル缶バッチを差し上げます（当日参加された方のみ）。ふしぎポストが設置されていない期間は、電子メール等で受付しています。

② マタギ、炭焼きなどの職業の方の体験談

山に入っての仕事を生業とされていた方、もしくはそのご家族の方で、山で体験した不思議な出来事や、仕事をする上での独特な風習、山の動物にまつわるお話などをご存じの方を探しています。些細な事でもかまいません。電子メール、または直接まなびあテラス総合カウンターまでお寄せください。

まなびあサン vol.2

by 金田こけもも


とある夜、事務室のテレビが突然ついて、少女らしき姿が映る怪異が発生！
ぱっ
多分、何かのはずみでスイッチが入っちゃったんだと思うんだけど怖かったよ
えーっ キャーッ
ホントー!?
開館以来初の怪異
その晩から、百物語の当番のスタッフは、夜の度にドキドキウキウキしたのですが…
お！怪しい人影!! 霊かな？？？
怪しい光！ 霊かな!?
その後全く現れず
おばけも期待され過ぎて出るに出れなくなったのかしら…
？
私達がプレッシャーをかけすぎてしまったのがいけなかったのか…
ごめんねおばけさん…

編集後記

子どもの頃から冬を題材にした怖い話が大好きでした。せっかく冬に怪談会をやるのだから、雪国らしいお話を皆さんと共に聴きたいと思い、「冬怪談」をテーマにしました。今回黒木氏が披露してくださったお話は、怖いというより、不思議さや切なさを感じるものが多く、夏の怪談とは一味違う、冬の新たな魅力を知る会となりました。巧みに緩急を使い分ける黒木氏の語り口を文字で再現するのにはやはり苦心しましたが、こうして第二夜の瓦版も無事に発行する事ができました。これをお読みになった方々にも「冬怪談」の魅力が伝わる事を願って。

まなびあ
テラス

第２号　2020 年８月 00 日 発行
発行：
東根市公益文化施設 まなびあテラス
〒999-3730
山形県東根市中央南1丁目 7-3
TEL：0237-53-0223（代表）
FAX：0237-42-1296
HP：http//www.manabiaterrace.jp
E-mail：info@manabiaterrace.jp
編集：まなびあテラス市民活動支援センター
スタッフ（高橋・天野）
執筆協力：黒木あるじ
デザイン：土澤 潮（デザイン事務所ペイジ）